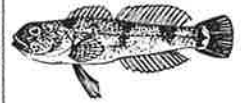


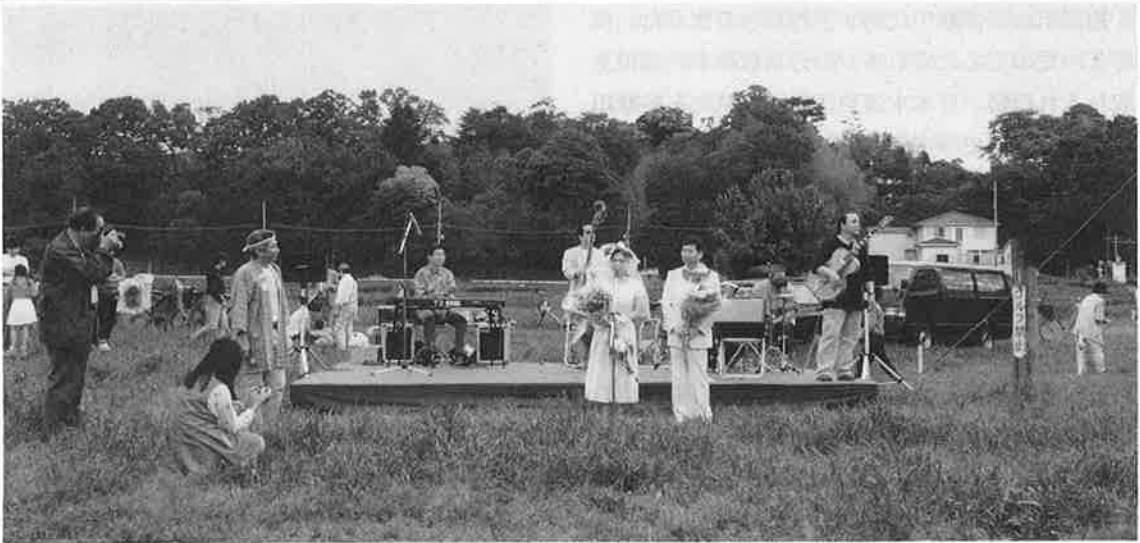
財団だより

多摩川

1995. 6 第66号



カジカ (カジカ科)
上流部の水の澄んだ雑底に住む。



野川の川原の結婚パーティ (平成7年5月撮)

■多摩川現風景■

(22) 川原の結婚式

5月のある週末、野川のくじら山広場で結婚披露パーティが行われた。川原で結婚式とは仲々粋な催しだが、野川流域はもともと住民の活動が活発ですでに前例がある。

この結婚パーティの新郎も野川を愛する活動家で川原でのパーティは夢だったらしい。何はともあれおめでたい事で、当日は薄曇りの中200人程の参加者が集い、さながらガーデンパーティのようなさわやかで華やいだ雰囲気であった。

多摩川の川原ではさまざまな催しが行なわれている。数年前の調査では、川原の一時使用願いとして届け出のあった催しとして多かったものうちベスト5は、1. マラソン大会、2. バーベキューパーティ、3. 防災訓練、4. テレビ・映画の撮影、5. 花火・ドンド焼などの伝統行事があった。その他、ユニークなものとしては洗礼式として上流の清流の中で体を清める儀式なども

あった。

先に挙げた結婚パーティは、毎年同所で行なわれている野川流域の住民による春のイベント「くじら山フェスタ」の行事の一環である。

このように川の好きな人々が、思い思いのスタイルで川に親しんでいる姿は、何とも言えない喜びを感じる。押しきせではない川の持つ素晴らしい要素を自分なりに引き出し、さまざまな関わり方がもっと増えれば、川はさらに魅力的な場になっていくだろう。

●関連する財団の研究助成 (Noは報告書番号) 〈一般研究〉

- ① 多摩川にやさしいライフスタイルの研究
1992年 鈴木敬子・大和田順子
日本ヒープ協議会 (No.79)
- ② 絵画にあらわれた河川景観の変遷
—多摩川を主として—
1994年 岡村直樹 フリーライター (No.84)
- ③ 野川における児童(親子)の水遊び場・川遊び行動についての実態調査
尾辻義和 野川で遊ぶまちづくりの会
(原稿作成中)

多摩川散歩

■ 粕江市の自然と歴史を訪ねて

「たまがわ散策マップ」 ■

元TAMAライフ21 矢萩隆信
「多摩川の復権」多摩川研究会会員

粕江市は「多摩川に晒す手作りさらさらに、何そこの児のここだ愛しき」の万葉歌碑や六郷用水取り入れ口跡、日本水道粕江浄水場跡など多摩川に関係する歴史や文化にあふれ、水辺には散策や野外料理など自然を楽しむ人々が多く訪れる地域である。

この粕江市で1993年10月24日にTAMAらいふ21テーマプログラム「多摩川の復権」の総括シンポジウムが開催された。このシンポジウムに市民が積極的に参画し、多摩川の自然環境や粕江市の歴史や文化をシンポジウム参加者にアピールするため、「粕江の自然と歴史を訪ねる」多摩川散策の企画提案が粕江市民によりなされた。

この提案を実施するため、市民が粕江市、郷土史家、自然愛好者などに働きかけ、「たまがわ散策実行委員会（委員長・倉持通夫粕江植物同好会事務局長）」が結成された。

実行委員会では、粕江の自然と歴史を紹介する絵地図を作成することが決められ、イラストのレイアウト、歴史・文化の紹介、自然の紹介、イラストレーターを選定などすべて市民の手によって行われた。

マップ中には粕江市内の歴史・文化遺跡の場所を示すとともに、市内の多摩川で観察できる野鳥、植物、虫などのイラストを配した。裏面には歴史・文化遺跡の解説を載せ、粕江市内の多摩川土手から見える、丹沢の大山から奥武蔵の武甲山までの遠望図を写真とともに掲載してある。

この絵図は「多摩川散策」の参加者等に配布され、武蔵野の面影が残る粕江市内の多摩川周辺の散策を行った際に利用した。粕江市内の多摩川周辺を個人的に散策する人々にとっても役立つイラストマップである。



粕江の自然と歴史を訪ねて、たまがわ散策マップ

TAMAらいふ21協会発行 1993年

私と多摩川



多摩川観察会河口出発点にて

1993年 9月

多摩川と語る会 田中喜美子

長いこと都心に通勤していた私にとって多摩川は小田急線の鉄橋の合間からのみ見る川だった。しかしそのほんのわずかな時間の多摩川にどれ程勇気づけられたことだろうか。朝は富士山をバックにした多摩川に元気づけられ、帰路は街の灯が川面に映ゆる多摩川に一日の疲れを癒されていたような気がする。

そんな多摩川へのお礼心が、退職した私を多摩川へ誘ったのか、気がついたら多摩川の虜になっている。

川崎市生涯学習事業団の市民企画講座で、多摩川のことをもっと知ろうと広く市民に呼びかけ「多摩川と語る」という講座を企画した。

古代の多摩川や中世の多摩川、そして現在の多摩川の植物・野鳥などについて講師を招いて学習を重ねた。その後自主グループとして当時の企画スタッフらと共に会を運営して2年になる。

昨年は川崎市制70周年記念市民企画事業に参画し、行政や他のグループの人々と共に、「多摩川ふれあいマップ」(川崎篇)を作成した。

この間川崎を流れる29.8軒の多摩川河畔に何度

も足を運んだが、その都度、自然のいじらしさ、たくましさで心を打たれた。わけても多摩川の河口に、初めて立った時の感動は忘れられない。

山梨県にある笠取山の水源から流れ出た多摩川の一滴の水が、はるけくも138軒を流れ来て、河幅500米を越える大河となり、とうとうと海にそそぎ込まれていく。

対岸は羽田空港だ。ジェット機が絶え間なく飛び立っていくが、多摩川の雄々しさに比べて何と小さく見えることか。

東京湾にそそぎ込まれた多摩川は太平洋に出てやがて世界の川につながる。

河口先端の突堤に立ちつくした私はしばしそんな夢を馳せたのだった。その突堤には釣人がたった一人釣糸をたれていた。

そして河口から少し目を移すと大きな干潟があり、無数のカニが嬉々としてたわむれていた。この干潟は渡り鳥を始め、多くの野鳥が集まる自然の宝庫となっているのである。

かつて川崎は公害都市の汚名を蒙り、市民のひとりとして辛い思いをしてきた。その工業地帯を背にした多摩川の河口にこんなに豊かな自然が息づいてきているのだった。この河口の風景と自然の残る干潟は川崎の貴重な財産であり、市民の誇りとして大切にしていきたいと痛切に思った。

ところで私達の多摩川と語る会の本来の目的はこの河口から源流までの138軒を自分達の足で調べ自然の状態や景観、流域の歴史や民俗などに触れ、21世紀に引継ごうということにある。そして一本の川で結ばれた緑を大切に、流域の人々と力を合わせて川を守っていききたいという願いがある。

河口から出発して約50軒。今、多摩大橋までを歩き終えた。

この間多摩川からどれ程多くの自然と感動をもたらしたことだろうか。

あと約90軒、これから上流へと向う多摩川河畔の道はきびしさを増すであろうが、未知との出会いに心はずませている。

甦れ！多摩川

■ 根川を歩く ■

三 省 道 山 三 財 団 環 境 浄 化 課 員 研 究 員 山 道 省 三

根川という名の川は各地で聞く。この立川市の根川の対岸、日野市にもある。

この川のことは、府中用水を調べている時に知っただが、用水路なのか川なのか皆目分らなかった。立川駅からまずJR中央本線と残堀川が交差している所まで行ってみる。途中、先日本堂が火災に見舞われた普濟寺に寄る。この寺は文名2年（1353年）に建てられた立川氏の居城で、いわば今日の立川市のルーツともいえる寺である。

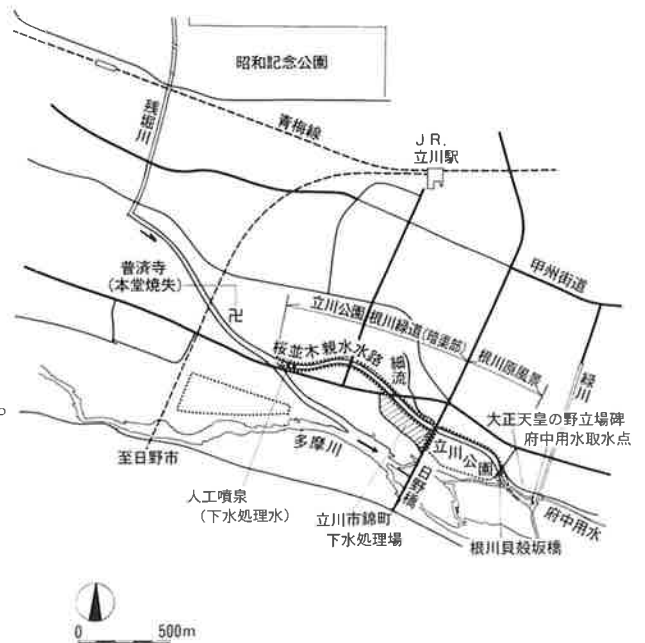
さて、残堀川であるが、かつて典型的な都市河川改修の見本とまで言われたが、JR線鉄橋から根川分離点までは兩岸見事な桜並木である。護岸は屹立しているものの河床は自然復元が進み、流路形状も変化があつていい。次の機会には瑞穂町箱根ヶ崎の狭山池を源流とするこの川を歩こうと思う。

根川は普濟寺から約300m下った左岸で分離され残堀川とは縁切となる。そして、その地点以降は立川公園根川緑道となって甲州街道葦（よし）見橋まで親水水路として整備されている。この水路の流頭は人工噴泉となっているが、水源は根川の中途にある立川市錦町下水処理場の処理水を高度処理したものがポンプで送られている。現在日量1600tを流している。見た限り処理水とは思えない。親水水路もいろいろ工夫されホテルの養殖やささまざまな水生生物の繁殖を試みているようだ。

根川には下水処理場のあたりで左岸の青柳崖線沿いに流れる細流が合流する。この流れは玉川上水の分水で柴崎用水と呼ばれる水の落しである。従って源流は多摩川羽村の水であり現在でも水利権は生きている。この細流と根川が葦見橋下で合流する。その葦見橋のもとに出た時、思わず声をあげそうになった。それは、この根川を訪れる前に見た、三田鶴吉氏監修の写真集「多摩川は語

る」(けやき出版：1985年)の中に出てくる昭和初期の根川の風景が眼の底にあって、ほぼそのままの風景が目前に展開したからである。多摩川水系の支川の中にまだこうした原風景が残っているとは想像もできなかった。ぜひ一度散歩がてら行かれる事をお勧めしたい。その地区は右岸側に立川公園の野球場と競技場があり桜並木が続いている。そして、公園のはずれ、もう多摩川が見える所に新たに木橋でデザインされた根川貝殻坂橋がある。江戸時代甲州街道の渡しがあつた所で、青柳崖線を下り多摩川の川原へ至る途中、崖地から多量の蛤の殻が出たところからそう呼ばれた。根川はこの橋から200m程崖線に沿って下って終る。最下流の水は一部が多摩川へ合流し、一部は府中用水となって取水されている。崖線の上には、大正天皇の御野立場の石碑や江戸期、民衆教化本の作家であつた伊藤単朴の墓などがある。

案内図



財団からのお知らせ

第1回とうきゅう環境浄化財団 助成研究ワークショップのご案内

「地域住民による環境回復への試み」

環境問題の改善の糸口として”Think globally, Act locally” (地球的視野でとらえ、足元から行動する)と、よく言われます。見近な環境問題として、家庭雑排水による河川汚濁、ゴミのリサイクル、雨水の利用等、関心が高まっています。

本ワークショップでは、当財団の助成により研究に取り組まれた4名の研究者の方々に研究報告をして頂き、討論を通じて新たな環境回復の指針をさぐりたいと思います。

日時／平成7年8月3日(木)
13:00～16:30

場所／国連大学 5階
Conference Hall

主催／財団法人
とうきゅう環境浄化財団

プログラム

13:00	開会挨拶	とうきゅう環境浄化財団 常務理事 コーディネーター	芳村重徳
13:05	報告1	「多摩川にやさしいライフスタイルの研究」 '90～'92助成 (株)イオンフォレスト	大和田順子
13:35	報告2	「多摩川に再びメダカを -多摩川水系のメダカの分布調査 とメダカ放流をめざして-」 '88～'90助成 横浜市水道局水質試験所	磯村康博
14:05	報告3	「水みちマップ作成の為の調査研究 -野川流域の湧水と地 下水の流れの関係について-」 '88～'90・'92助成 三多摩問題調査研究会	神谷博
14:35	報告4	「市民の手による浅川、矢川、野川の水質合同調査と水質表 現の研究」 '92～'94助成 東洋大学短期大学	大竹千代子
15:05	休憩 (10分)		
15:15	総合討論会	コーディネーター とうきゅう環境浄化財団 常務理事 コメンテーター 東京農工大学 教授	芳村重徳 小倉紀雄
16:30	閉会		



○駐車場はございませんので、お車での御来場はご遠慮下さい。

定員
100名
参加費
無料

申込方法

往復ハガキに住所・氏名(勤務先の場合は役職名、自宅の場合は所属団体名)各々の電話番号を明記し事務局まで送付下さい。

申込〆切

お申込みは先着順で定員になり次第、〆切ります。

お申込み・お問合せ

〒150東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

(財)とうきゅう環境浄化財団

TEL 03(3400)9142

FAX 03(3400)9141

〈平成7年度研究助成選考結果〉

去る3月6日第37回定時選考委員会を開催し、平成7年度の研究課題の選考を行い、学術研究7件一般研究4件が採用されました。研究課題は次のとおりです。

研 究 課 題	代表研究者	所 属
(学術研究)		
●カワラノギクの個体群と生育環境の復元についての研究	井 上 健	信州大学教養部助教授
●多摩川上流部の水源林の保水能力の推定に関する研究	市 川 新	東京大学工学部助教授
●多摩川河口域における水鳥相の解析 (特に東京湾の干潟環境との対応について)	桑 原 和 之	千葉県立中央博物館 学芸研究員
●多摩川流水域における新テレメトリーシステムを用いたアナグマの環境選択	神 崎 伸 夫	東京農工大学農学部 野生動物管理学講座助手
●多摩川における増水が生物の分布に及ぼす影響(フラッシュ効果)についての研究	亀 山 章	東京農工大学農学部教授
●多摩川流域に生息する蝶類の遺伝的多様性とその保護に関する研究	小 原 嘉 明	東京農工大学教授
●多摩川およびその流域の都市化と環境保全	中 井 達 郎	(株)日本自然保護協会 研究部長
(一般研究)		
●住民に提供するための多摩川流域の植物写真画像システム作成に関する研究	大 川 ち 津 る	成徳学園高等学校講師
●「多摩川中流域に分布する上総層群の古環境と水河性海水準変動」の教材化	藤 井 英 一	東京都立晴海地区総合学科 高等学校(仮称)教諭
●多摩川上支流の土壌生態的比較に関する研究	福 田 直	埼玉県立自然史博物館 調査員
●条理遺構の分布を手掛かりとする多摩川流域の古代における水田景観の研究	菅 野 雪 雄	元、通商産業省工業技術院

寄贈文献の紹介

●「第3版 水質調査法」

半谷高久・小倉紀雄 共著 1995年 丸善(株)

水に関する基礎知識、水質調査の計画のたて方、現地での調査の具体例、水質分析法、測定結果の整理と解析等をわかりやすく解説している。また巻末に索引をつけ、辞書的機能も備えている。

●「すぎなみ水紋様 — 今昔抄 —」

恩田政行著 1995年 (株)青山第一出版

著者の住む杉並の生い立ち、荒玉水道と井荻水道の沿革とその背景、杉並の浄水場、給水所の歴史とその役割等を論じ、善福寺池、善福寺川を含めた各々の水質調査を行い、化学者の立場で水質汚濁指標項目を解説している。

・発行日 平成7年6月1日

・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125

